



僅かに頬を掠める冷たい夜風に、闇に落ちていた意識が薄つすらと持ち上がっていく。

目を覚ますと、そこは満天の星空だった。

東の空で燦然と青白く輝くこと座のベガを支点に、はくちよう座のデネブとわし座のアルタイルを結べば、夏の大三角形の出来上がりだ。

そこから、南へ流れる乳白色の天の川を迎れば、さそり座のアンタレスが赤い輝きを放つ。

サソリの尻尾を辿り、猫の目まで視線を泳がせている内に、臍げだった思考が徐々に晴れてくる。

先程から、絶え間なく聞こえてくるさざ波に、ようやく海が近いことを理解した。

波音が大きくなる度に、僅かに湿った海風が運ばれてくるのが心地い。

無意識の内に手の平を泳がせば、サラサラと柔らかい砂地の感触が伝わってくる。

まだ覚醒しきっていない思考を彷徨わせる中、今年の夏の休暇は海に行きたかったこと思い出す。

いつ頃から海へ来たのかを思い出そうとして、思考が混沌し始めた。

どんな風に考えても、全く見当違いな思考回路に、一気

に目が覚めた。

そして、なぜ明かりもない砂地に、1人で寝転がっているかも分からず、起き上がるうとした瞬間、左足に激痛が走った。

「痛つつあああああ！」

あまりの痛さに再び、砂浜に背を預けたスペインは、早く状況を理解しようと、周囲を見渡していく。

そんな中、絶叫にも近い声を気付かれたのか、少し離れた所で、小さな明かりがキラリと光った。

次第に大きくなっていく光は、確かな意思を持ってこちらに近づいてきてるらしく、咄嗟に身構える。

暗闇に慣れた目では、少しの明かりも眩しくて、目を細めた時、それがスマホの明かりだと気付かされた。

そして、明かりの持ち主が、ぶつきらぼうに呟いた。

「気が付いたのか」

聞き覚えのありすぎる声に、絶句するスペインを他所に、その隣に腰を降ろしたのは、鮮やかな金の髪を持つ青年だった。

自分よりも、淡い新緑のような瞳で覗き込まれると、鮮やかな金髪の隙間から、特徴のある眉毛が見え隠れする。嫌な予感的中してしまい、泡を食ったスペインは、先程の痛みを忘れて飛び起きようとした。

「おまつ！なんつっで、いつでええええ」

学習能力もなく、再び砂浜に崩れ落ちるスペインを、イギリスが慌てて支えた。

「バ、バカ！急に起きるな」

補助する手付きは優しいが、電池の消耗を減らすためか、スマホの明かりが消えると再び暗闇に戻った。

痛みのせいで元の体制に戻るしかないスペインは、目頭に涙を溜めながら、苦痛に小さく呻く。

「っ、くうう・・」

まだ欠落している記憶を、手繰り寄せようと必死になる一方で、痛みが邪魔をする。

空回りする思考が混乱を極める中、隣からため息が漏れ聞こえた。

そして、再び点けたライトを、後方へ向けた。

「あそこから落ちたんだよ、思い出したか？」

崖と呼ぶのに相応しい高さに、目を剥いて青ざめたスペインは、治まっていた痛みが復活しそうだった。

「マ、マジで？」

「冗談なら、よかつたんだけどな・・」

苦々しく言い放ったイギリスが、再びライトを消せば、闇夜の中に波の音だけが響いた。

次第に記憶が蘇ってきたスペインは、別の意味で混乱し始めた気分を落ち着かせようと、冷えた両手で顔を覆っていく。

そして、ついでとばかりに目を閉じれば、数時間前の出来事が、鮮明に思い出せるようになっていた。

夏休暇の直前に行われた欧州会議は、イタリアが開催国だった。

休暇中のテロ対策や、今後の大まかな指針など、片付けたい問題が山積みだった。

サマーバケーションが始まれば、観光客も倍増する。

そのため、簡易的にでも、意向をまとめておく必要があった。

休暇前で気がそぞろな連中が多い中、必然的に注目の的になったのはイギリスだった。

「あゝ、それで、やはり9月以降にならないと分からない感じが？」

進行役のドイツに控えめに尋ねられ、眉間の皺を強くすると、苦々しく答える。

「まだ、どうなるかは、俺にも分からない」

今後どんな事態になるかも分からず、迂闊な事も言えないイギリスも、国の結論を待つだけの身だった。

自分達の意見など、民衆の意見一つでひっくり返されることを、皆が分かっている。

だからこそ、会議中はそれ以上の追求もなく終わった。しかし、会議終了後、廊下でバツタリ出くわしてしまっ

たのが、全ての元凶になるのだった。

会議が終わった後、ロマーノを探していたスペインは、ゆったりした足取りで廊下を歩いていた。

シエスタに行ったつきり、昼以降の会議をすっぱかしたロマーノは、よほど上手に隠れているらしく、全く姿が見当たらない。

諦めてフランス達と合流しようかと考え始めた頃、窓の外で映え渡る海に目を奪われた。

「キレイやなあゝ」

イタリア最大の貿易港でもあるジェノヴァは、リグリア海を一望出来る。

日差しを浴びてキラキラと輝く大海原は、広大で吸い込まれそうなほど鮮やかだった。

海に魅了されるがまま、窓枠に腰掛けたスペインは、廊下の角を曲がってきた人物が、すぐ近くに来るまで気付けなかった。

「うげっ」

嫌悪感が滲む声に、疑問符を浮かべながら振り返ったスペインは、相対する人物に同じように顔を顰めた。

「げっ・・・」

積極的に会おうとはしていないのに、同じ敷地内にいる限り、遭遇率が高いのは否めない。

しかも、お互いに無言で通り過ぎれば、問題は最小限で済むのに、つい声を掛けてしまう。